

土岐信吉

夢窓疎石





夢窓疎石

土岐信吉

河出書房新社

夢窓疎石

著者 土岐信吉

装幀 巖谷純介

一九九四年二月一日 初版印刷
一九九四年二月一〇日 初版発行

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷一―三二―
電話 (〇三)三四〇四―二〇一〈営業〉
(〇三)三四〇四―八六一―〈編集〉
振替 〇〇―〇〇―七―一〇八〇二

印刷 株式会社亨有堂印刷所
製本 大口製本印刷株式会社

© 1994 Printed in Japan
ISBN4-309-00939-5

著者略歴

土岐信吉 (とき・のぶよし)

一九三四年高知県生まれ。土佐高を経て、横浜市立大学卒。作曲を小船幸次郎氏に師事。一九六六年、川崎少年少女合唱団を創設。同代表。海外公演五回。川崎市文化賞受賞。トキ音楽スタジオ主宰。著作として『千利休』『一休宗純』『古田織部』(いずれも河出書房新社)のほか、教育音楽関係の著書多数。

第一章 蕩子遍参

5

第二章 無師独悟

82

第三章 箇中の人

177

第四章 林泉高致

275

*庭園に関心のある方はとくに以下を御参照下さい。

虎溪山永保寺 154頁〜176頁

鎌倉 瑞泉院（瑞泉寺） 217頁〜219頁

甲斐 恵林寺 222頁〜227頁

京都 臨川寺 246頁〜255頁（現在は失われている幻の庭を再現してみました）

京都 西芳寺 287頁〜300頁

京都 天龍寺 305頁〜311頁

夢窓疎石

第一章 蕩子遍參

晴れやかに打ち鳴らされる鉦かねの音が綿雲光る青空へと澄み昇ってゆく。

へたゞ一念ほんげんの本源は、自然むねんの無念なり、

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、南無阿弥陀仏……………

湧わき起おこる念仏は潮騒しおさいのように地頭屋敷じちうぶきの築地塀ついでいを乗り越えてくる。鉢はちやひさげを打つ音に混じ

って叫泣きうきする声。と、家人の気配けはいのない母屋おもやから小袖こそでに裳袴もげかまの童児わらべが跳び出してきた。

匂においやかな沫雪あわゆきが降り積んだ庭を横切り、物見の櫓やぐらへ攀よじ登ってゆく。身丈みのたけより高い矢楯やたてを紅葉もみじの手で横にずらせ、その間から身をぐっと乗り出した。

弘安元年こうあん（一二七八）早春。伊勢国安濃郡片田郷井戸に住む地頭、佐々木朝綱ささきあすなの館やかた。童児は四歳になる朝綱の子、寿王丸じゆうおうまるであった。

鼓草つみぐさが咲き乱れる村の広場では里人が群れ集い、一人の乞食僧の周りに跪ひざまずき、唱和する念仏は大氣に木霊こだました。里人の中には武士も混じっている。大口を開けて狂ったように笑い続ける者がい

るかと思えば、涙を流し鳴咽し抱き合う者もいる。二人の尼僧を従えた瘦身の僧がやにわに五体投地の礼拝を始めた。雪解けの泥土の上に、吾身砕けよとばかりに繰返し倒れ込む。敬虔なその貌はみるみる泥濘に塗れてゆく。群衆の興奮は頂点に達したとみえ、念仏は噪き声に転じ、足踏みは大地を揺り轟かせた。深い恐怖に身を震わせた寿王丸は矢楯の陰に隠れる。やがて鈍い動作で覗いた寿王丸の眸に、その僧は逆光の中に独神の陰影となって浮かんでいた。

陽は西に傾き、燿かしくも短い一日が夕焼けの空に翔去ろうとしていた。櫓上の寿王丸は緊張の連続に疲れ果て、泥足を投げ出して、うつらうつらしていたが、藍色の冷氣にぶるっと身震いして立ち上がった。念仏の僧と二人の尼僧たちは、遠く光の中を去り、村の広場はしんと静まり返っている。風に乗り、女たちの歓声が聞こえてきた。寿王丸はにこっと笑って、梯子を降りはじめた。

木戸が開き、琴の音色の北風と共に臉を真赤に腫らした女たちが入ってきた、手に手に念仏札を握り締めている。札には「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と書いてある。一際目立つ艶やかな女性の名は茜、北条政知の娘で地頭佐々木朝綱の妻であった。

「一遍上人様は、智恵や愚痴、善悪、貴賤、地獄を恐れる心、極楽を願う心など、全てを捨て去って『南無阿弥陀仏』の名号をのみ唱えれば救われる」と申されました。念仏を唱えて踊っていると、不思議に不安な気持ちは消え、上人様はいずこへか去られましたが、わたしたちの手にはお札が残っております。これさえあれば救われるのです。悩みの日々は疾うの昔になりました」

茜は寿王丸を抱き上げて、その頬を念仏札ではたはたと優しく撫でさすった。白い歯を見せていた寿王丸の耳がぴくりと動いた。

「お父上じや。お父上のお戻りじや」

馬の嘶いななきと馬蹄ひづめの響が草木を戦そよがせた。小桜こざくら黄返きやうへん緘しんの腹巻に、三十六間筋胃、光る猿頬さるほの奥から琥珀色こはくいろの荒んだ眼が窺のぞく大男は地頭、佐々木朝綱。続く二十騎ほどの騎馬武者は血腥ちなまぐさい殺気をあたりに振り撒まきながら、戦利品を満載した荷車を次々と馬場に引き入れた。茜のまわりの女たちは血相を変えて、蜘蛛くもの子を散らすように屋敷内に駆け込んだ。

「茜よ、不心得者ふこころえ共は始末してきた、今宵は祝いの宴うたげをはる。酒菜さかなの用意をせよ」
頭を下げる茜の胸はずきんと痛んだ。

——このお方は救われぬ……。

片田郡に隣接する土地の支配権をめぐる紛争は、東寺と地頭佐々木朝綱の間でここ十年ほど続いていた。しかし朝廷への朝綱の訴えも一向に埒らちがあかず業ごうを煮やした朝綱は東寺雑掌ざうしやう、重舜じゆうしゆんの預あづかり所を襲撃しては農民たちが納めた年貢ねんぐを横取りしていた。この日も散田さんでん（荘園の直營地で農民に耕作を請け負わせた田）からの檜皮ひわだ、栗、炭、綿、藍、麻、雑穀を奪うために太井荘へ乱入し、抵抗する殿原衆とのばらしゆう（上層の農民）を多数、血祭りにあげていた。抜け目のない朝綱は「兵糧米ひやうりやうまい」として農民たちが市場で稼いだ銭貨も、しっかりと掻かき集めて来たようである。

四日後の夜半。寝静まっている地頭の館は山の冷氣の中で黙々と威容を見せている。青臭い土の匂いの中に蠢く頭巾、鈴掛（修験の衣）に腹巻を着けた三百余の兵が、じりじりと館を包囲し始めていた。どうやら東寺側が報復に出たようである。

馬小屋の戸が開いて、夜着の小者が飛び出して来た。小走りに築地に駆け寄ると腰を振って裾をからげ、鼻唄交りに放水を始めた。雲間から現れた月が男の背中に冴えた光を投げかける。すると背後の大杉の陰から滑り出した修験者が音もなく忍び寄った。一気に走る白刃、「ドスッ」。霧となつて飛散した黒い噴血と共に首は胴と離れて、地面に乾いた音をたてる。暫く、ゆらゆらしながら立っていた首のない胴は蕭殺の太氣の中でどうと転倒した。漆黒の草叢から法螺の音が湧き起り、あちこちの火桶の火種から赫々と移された火矢は流星となつて地頭の館の薬屋根に降り注いだ。けたたましい物音に櫛を蹴った朝綱は素早く腹巻を着け、太刀を鷲掴みにして庭へ飛び出した。左右から打ち振る敵の柴打（炉壇で護摩木を切るときに使う太刀）を一挙動で弾ねとばした。

「夜襲とは、卑怯者めらが……」

血飛沫と濡れ手拭を叩きつけるような斬刀の音……朝綱のまわりに修験者の断末魔の叫喚が起り、凍った地面に黯々と熱い血が飛び散った。

ようやく集まつて来た源次郎以下郎党たちに朝綱は口早に命じる。

「敵は多勢じゃ、女子供を中にして一団となつて脱出する。よいな、抜かるなよ」

敵の持つ松明の光に茜の姿が浮かび上る。

「危い。伏せろ」

朝綱の声は一瞬遅く、飛来した矢が茜の肩を深々と貫いた。茜の悲鳴が夜気を裂く。

「しまった。源次、奥方を頼む、行き先は安濃津じゃ」

言い残した朝綱は群がる敵の真只中へ鬼神のように斬り込んでいった。

兎にも角にも敵は多すぎた。日頃の朝綱の略奪に激怒した東寺公文頼尊が動員した悪党三百余騎は瞬く間に地頭の館を焼き払った。一時、裏山へ逃げ潜んでいた朝綱と郎党たちは手負いの茜ら女と童をともない、安濃津から海路、甲斐国を目指して落ちていった。

一足先に牧の荘の領主二階堂行藤を頼って甲斐に入った朝綱一行とは別に、矢傷の悪化に苦しんだ茜は駿河、江尻の慈心という御家人の家で養生していた。ようやく步行出来るようになった茜と寿王丸の一行が甲斐の砦に入ったのは雲の峰のもと夏の日の満ちわたる頃であった。

疲れた足を引き摺って痛々しい壺装束の茜を出迎えたのは夫、朝綱ではなく郎党源次であった。源次は地面に跪いて心なしか蒼ざめた顔で告げた。

「殿様には当地にて新しい奥方を迎えられ、側室様御二人も鎌倉から屋敷に到着なされております。茜様には御役ご免につき平塩山寺で傷の手当てをなされますように」

「なんと……理不尽な。そのようなことがあってよいものか。殿様に逢わせて下され」

眼を血走らせ、唇をわなわなと震わせた茜は源次の胸倉にしがみついて絶叫した。

「皆の者、聞いて下され、このような……」

よろめき跪いた茜は広場を見廻したが人影は消えて、茜の声は空しく彷徨った。

「寿王丸様は廃嫡となり、平塩山寺の空阿様へお預けの身と決まりました。それがして、このような役柄は辛うて……」

源次は金子のつまった革袋を茜の骨ばった掌に握ますと、くると背をむけ、炊ぎ部屋（台所）の裏戸に消えた。

呆然と佇む母子の耳もとに蟬の鳴声と蜜蜂の羽音だけが噪いていた。吐息し、噎れた声で何やら呟いた茜は寿王丸の幼い手を引いて、四方八方真黄色に散乱する陽の光の中を一步一步と進む。足もとの、そこここに咲く小さい花々は深淵に突き落とされた女の哀愁に咽んでいるかのようであった。

平塩山寺の空阿大徳はこの地方で国博士と呼ばれ、密教の導師としてだけでなく、国学でも人々の信望を集めていた。平塩山寺は昔、国府の聖堂であったところで、このあたりでは珍しい葺の波をもつ大寺であった。空阿は唐の医学書「和剂局方」に詳しい医師でもあった。温かく迎えられた茜ではあったが、心の衝撃があまりに深かったためか空阿の治療にも拘らず、牀は衰弱する一方であった。ここ数日、寝たきりの状態で、さしもの空阿も匙を投げていた。

「おんろけいじんばらきりく　そわか

おんまかきやろにきや　そわか

金堂では今日も空阿と寿王丸が須弥壇に向かい真言を唱えている。十一面観世音菩薩心呪を唱え、香木と護摩を焚く。濛々と立ち昇る白煙。わずか四歳の童児は頭を垂れ一心に祈っている。

——この童児は貴物だ。只者ではないぞ……。

静かに礼拝した空阿はちらと寿王丸に目をやった。牛王杖の打撃、乱声の銅鑼に微動だにしない寿王丸を見て空阿は舌を巻いた。

——このような童児は神に近いところにおる。異常だ。あまり長生き出来ぬかもしれぬ——

寺の裏にある雑木林は寿王丸の好きな場所であった。藍色の池の面に雲の影が映っている。雲が流れると腰をおろしてじっと見詰める自分が虚空を飛翔するようで寿王丸は嬉しかった。梢の上から雀がこちらを見ている。寿王丸は、自分と雀が一緒になって飛んだり啼いたりしているように思えた。雀をほんとうに可愛いと思う。そう思うといつの間にか寿王丸は雀になっていた。雀が寿王丸の小さな掌にのって頭をこすりつける。寿王丸は雀を掌に握ってみた。温かい。掌を開くと雀はおずおずと肩のところまで歩いてきた。親雀がやってきた。

——あなたの母者が呼んでおるぞ——

こくりと頷いた寿王丸は赤、黄色、褐色の落葉を蹴散らして走った。境内に駆け入った寿王丸はぎよっとして立ち止まった。

金堂の妻戸が開いて死の床にある筈の母、茜が小袖に桂を羽織った姿で艶然と簀子に立っていた。垂し髪、長いまつげ、細面の香氣に満ちた女人の頬に、ほんのりと紅をさしている。

「母上様！」

寿王丸は涙を振り零しながら、夢中で母の胸に飛び込んだ。鳥襷紋の小袖が涙と鼻汁で濡れる。茜はひとと吾が児をかき抱いた。

「おお、いとしや、そなたには淋しい思いをさせます……」

人気のない境内に母と子の嗚咽が低く流れた。涙を袖で拭った母は細い指先で寿王丸の頬に弧を描いた。

「いとしい児よ、そなたと別れる時が参りました」

寿王丸はこくりと頷いた。

「わかっておる」

「そなたは鳥や魚と話の出来る不思議な児。なにもかも知っておるようじゃ……。わたしはそなたに財産を残してはやれぬが、それなど比べものにならぬ大切なものをあげます。そなたの掌をこうして……」

母は寿王丸の紅葉のような掌をとって自分の胸にあてた。

「よいか、これからわたしのいのちをそなたのいのちの中へ移し、思い固めます。死ねば天地一杯のいのちが虚空にばら撒かれます。その前にしっかりと思い固めておきましょう。そうすればそな

たには超^{おと}な能力^{ちから}が備^{そな}わるでしょう。そなたはその能力を使って世の縁の下の礎石となりなされ。人々を彼岸^{ひが}に渡す「橋」となるのです。「橋」の美德は堪^たえることも、踏まれることも意識しないで、それを天職とすることです。真実の相は仏のみ知りましたもうといわれていますが、そなたの能力をもってすれば大導師になれまするぞ。宗派、貴賤など虚仮^{こけ}の沙汰^{さた}じゃ。そなたには出来る筈……」

母はふと苦笑した。

「未だ頑^{がん}是^ぜ無いそなたには解^{わか}るまいのう」

寿王丸は小さな掌^てで母の胸元をはたはたと叩いた。

「たあち、^乳がほしい」

「そうか、たあちが懐^{なつか}しいかえ。最早^{もはや}枯れ果てたあちを吸うてみるかや」

母は胸元をくつろげて白く光る乳房を出して寿王丸の口元に付けた。寿王丸は頬ずりをしてから乳首をくわえ頭を振り立てる。母は激しく心が乱れ、熱い涙がどつとこぼれて寿王丸の顔へ滴^{したた}り落ちた。白い顔がのけぞり、短く「あっ」と声がもれた。寿王丸は母の乳首から温かいものの奔流が自分の体内にゆきわたるのを感じて、かすかな暈^{めま}いと共に眠りの底に落ちていった。

「これ寿王丸、目覚^{めざ}めるのだ、これ……」

肩をゆさぶられて寿王丸はとび起きた、簀子^{すのこ}で、赫^{あか}ら顔の空阿が厳しい顔をして見下ろしている。

金堂からは読経が聞こえ、香木を焚く匂いが漂ってくる。空気は冷え、雑木林は夕陽を受けてい

やさやかに透き渡っている。尋常でない気配を感じとった寿王丸は身を固くした。

「母者が死んだというに昼寝とは何事ぞ」

寿王丸の心を震え上がらせる言葉を一閃した空阿ではあったが、あとは、やさしく寿王丸の手を引いて堂内に歩み入った。香木と護摩を焚く白煙が濛々と立ち昇り、屋根裏に吸い込まれてゆく。

「のうまくさまんだばざらだんかん のうまくさまんだばだのうぼく……」

密師が真言を誦して印契を結ぶ。寿王丸の母、茜は瘦せさらばえ、眼窩は落ち、佝僂しく死の床に横たわっている。

「そなたの母者は淋しくこの世を去ったが、その魂はこの堂内で甦り、あの天井の隙間から流れ出て、仏のもとへと参られるのだ。よく見ておくがよい」

空阿は天井を指差しながら笈酒の盃をぐいと飲み干した。母の枕元に蹴り寄った寿王丸は堂の須弥壇のそばに黒い人影を見つけて、怯えたように空阿の背後に逃げ込んだ。

「これ、落ちついてご挨拶をするのだ。このお方はご領主、二階堂行藤様じや」

「いや、驚かせて悪かったな」

立烏帽子に水干狩衣を纏うた武士は悠然と姿を現した。色白、骨太で大柄である。切れ長の双眸は穏やかな香華を漂わせている。二階堂行藤、鎌倉の名だたる御家人で甲斐、牧の荘一帯の領主であった。